

作業療法体験者からの Feedback Session ～聞こう！体験者の声～

司 会

安藤 芽久美

兵庫県立リハビリテーション中央病院

コーディネーター

稲垣 俊秀

兵庫県立リハビリテーション中央病院

本企画は、日々実践する治療や関わりを振り返り、これからの作業療法実践に活かすことを目的としています。このため、在宅復帰された3名の作業療法体験者をお招きして、急性期から在宅に至るまでに印象に残った経験や思いについてプレゼンテーション頂きます。日頃なかなか聞けない直接的な声を聴き、理解を深められればと考えています。

●脳血管疾患

今枝 睦宏 氏(兵庫県脳卒中者友の会あけぼの会)

気遣って掛けていただいたことばでも発症後はなぜか心にグサッとささることばもあれば、ふとしたことばやしぐさにありがたさを感じ、元気をいただくこともありました。また、同じようなことばがけでも、相手との心のつながり次第で、受け取り方も違ってきます。

私は脳梗塞を発症して8年目を迎えようとしています。発表では私が脳梗塞を発症する前兆から現在に至るまでの様子、及び入院当時から感じている『何気ないことばやしぐさが持っている、力の偉大さ』について発表させていただきます。

発表をお聞きいただいた方々や、医療現場に携わっておられる方々の今後のリハビリテーションの一助になればと考えております。

●脊髄損傷

土田 浩敬 氏(兵庫頸髄損傷者連絡会)

私が仕事上の事故により、頸髄を損傷したのは2005年のことである。まさかこれから自分が障害を持って生きていくことなど、全く思ってもみなかった。

高所からの転落により頸髄を損傷し、その日から障害者になったのである。今では在宅生活を離れて地域で暮らす中で、社会参加することにより、自分は障害者なのだと認識させられることが多々ある。私は世間では障害者なのだとは自覚するようになったのだが、事故当初はまだまだ障害があることなど分からずにいた。どのように日常を過ごせばいいのかも分からなかった。ただ一つ言えることは、私の足はもう二度と以前のように歩くことが出来ないということ。必然的に車椅子が必要なのだ。それは受傷後、折れた首の骨を固定する手術の

あとに主治医から言われたのだ。なるべく早い段階で車椅子に乗って慣れること。私は言われるがまま車椅子に乗せられた。それからは来る日も来る日も毎日決まった時間に、車椅子に乗るようになった。初めは車椅子に座っていると、起立性低血圧で目の前が真っ白になり、意識が何度も遠のいていった。後から考えてみると、それは必要なことであったのかもしれない。車椅子に乗ることにより、徐々に習慣付いて生活の一部となった。車椅子に乗ることで血圧も安定して、息苦しさも無くなってきた。肺活量も上がり、声も大きく出せるようになった。そして、外に出たいという意欲に繋がっていったのである。

今の私は電動車椅子で日本中を駆け巡り、海外旅行にも行くようになった。香港、ロサンゼルス、シンガポールと行ってきた。それは受傷後、主治医から車椅子に乗るように言われたことがキッカケだったのかもしれない。日常生活を送る上で車椅子は絶対に必要なものになった。不便さを感じて、より快適にするにはどうすれば良いのかを考えることで、私のQOLは自然と上がっていったのだ。携帯でメールを打ちたい、テレビのチャンネルを変えたい、エアコンの操作をしたい。両手両足が使えないのであれば、口を使えばいいのだ。

より良く日常を過ごしたいと思う初めの一歩は車椅子に乗ることだった。手術後に主治医からの一言が無ければ、今の私の生活がなかったかもしれない。リハビリはその人の人生を変えるほど、重要なものだと私は考えている。

● 上肢切断

赤坂 久枝 氏

私は2015年12月9日、中国自動車道で事故を起こし、A病院に搬送された。病院に着くまでの間に二度心肺停止状態に陥ったそうである。病院で右腕を切断されたが、意識を失っていたので、そのことについてはまったく覚えていない。意識を回復したのは12月23日であったが、それ以前から、PTとOTの先生方がわたしにかかわってくれていたと後から聞いた。2月に私の住まいに近いB病院に転院した。事故後、人工透析を受けていたため、B病院での主治医の先生は腎臓の専門医であった。ところが転院直前から尿が出始め、結果として、透析が不要となったため、B病院では主として、左腕への利き腕交換のための訓練が行われ、そこで右腕用の能動義手も作ってもらった。しかしその義手はほとんど使えず、退院後、訪問介護に来てくださっていたOTの先生が、リハビリを専門とするC病院につないでくれた。C病院に入り、能動義手を作り直して、ようやく義手というのはこういうものであったのかと納得がいった。C病院での訓練により、腕を失う以前の生活に近い生活ができるようになった。今年の2月には、オーストラリアのゴールドコーストまで一人で旅をすることもできた。関空を出発し、ケアンズで国内線に乗り換えるので、とても不安であったが、幸い、誰の力も借りずに、自力で大きなスーツケースをもって、国際線から国内線に乗り換えることができ、大きな自信となった。